

押入れ産業社長 森田 浩史氏

高校時代は、陸上競技が生活の中心だった。他に



も生徒会長や文化祭実行委員長もやった。目立っていただろう。モテた。1年の時からバレー部の子と付き合っていた。そんな有頂天な高校生活も受験期を迎えた。成績も常に10番以内。受験も何とかなると高を括っていた。だから

き。学生でも社会人でもない。しかし、ぼやっとしてはいられない。早速、予備校を受けなければ。目指す予備校の午前部は試験がある。しかも成績順でクラス分けが決まる。自信喪失の中、予備校の試験を受けた。合格した！予備校に。とはいえ、クラスは最下位。かろうじて引っかけた。毎日通ったお茶の水。忘れられない授業がある。O先生の英文解釈。この先生の授業の9割は人生観、道徳観、哲学に関するもの。奥の深い話を独特の言

挫折から学んだもの

出願も1校のみ。父も祖父も卒業した大学・学部。自分も当然受かるだろうと……。

試験当日のことは今でも忘

れない。問題用紙を見た瞬間、頭が真っ白になった。見たことのない問題が並んでいた。落ちたと思った。実際、私の受験番号は

掲示板上になかった。浪人。何とも言えぬ響



他にも予備校の授業では多くを学んだ気がする。全国から集まり、皆同じ境遇で、この環境から脱出したいという思いで授業に臨んだ。悔しさと焦りともどかしさが交錯した10代最後の年。負け惜しみではなく、この経験は大きなバネとなり、社会人人生の教訓として生かされている。